

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	モリエールにおける《honnêteté》の問題
Author(s)	三木, 島彦
Citation	フランス文学, 16 : 24 - 32
Issue Date	1986-05-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040955
Right	
Relation	



モリエールにおける《honnêteté》の問題

三 木 島 彦

ベニシューがその著『大世紀のモラル』に指摘しているように、⁽¹⁾モリエールは体系的な思想家 *homme à système* ではない。神学者 *théologien* や独断で割り切るモラリスト *moraliste à parti pris* でもない。したがって、モリエールの喜劇の言葉に、ある特定の思想家のレミニッセンスを認めることがあっても、それをもって直ちにその場所にモリエールの立場を帰することは、誤解を招くのみならず、不可能な試みである。ここに研究者としての一つの態度が提示されうるのではあるまいか。すなわち、彼の喜劇の中に打ち立てられた彼独自の良識 *bon sens* を出発点として、古典主義時代の息吹きの中、多様な在り方で相集い、相反撥する「思想家」の共通の心情を浮かび上がらせ、そこに現代に通じるフランス精神の伝統とも言うべき「しなやかさ」を見るべきではなかろうか。本論では、その良識を人間観、処生の術と密接に関わる *honnêteté* の理論を通じて考察し、その向こうにモリエールのヒューマニズムの有り様に関する一つの仮説を示したいと思う。

ここで特に問題とするのは、モリエールがイズム・主義としてではないが、フランス文学の伝統としてのモラリストの系列に属していることである。その伝統とは人間性の探究であり、モンテーニュ、フランソワ・ド・サル、デカルト、ラ・ロシュフーコー、パスカルなどこれから言及する一連のモラリストと言われる人々は同じ土壌に育ったと言える。それでは、モリエールにとって人間の描き方はどのような法則に基づいていたのであろうか。それについて、モリエールは『女房学校批判』における彼の代弁者ドラントにこう語らせている。

あなたが人間を描く時、自然に従わなければなりません。そうした肖像は似ていることが望まれるのです。もしあなたがそこに同時代の人々の姿を認めさせないのであれば、何にもならないのです。オネットム（良識ある紳士）を笑わせるというのは、並々ならぬ企てなのです。⁽²⁾

ここに言及されている「自然」 *nature* とは古典主義の概念における「理性」 *raison* 「良識」 *bon sens* とほぼ同義語に用いられていると思われる。さらに、オネットムに関して予め指摘しておくならば、モリエールにおいても、それはこの時代の社交界で、人を喜ばせるためのあらゆる資質を備えた紳士の理想像として捉えられている。

I

モンテーニュ、パスカルはともに、職業、狭い専門などにとらわれず、幅広い教養や美德に裏打ちされた人格を、オネットムと見做している。モンテーニュは、『エッセー』の中で、子供の教育について、「私たちは、文法家や論理学者ではなく、一人のジャンティヨム（紳士）を作ろうとしているのです」と述べているが、この「ジャンティヨム」 *gentil* ' *homme* が十七世紀のオネットムにつながってゆくのは、これまで指摘された通り、⁽⁴⁾次に掲げるパスカルの『パンセ』の言葉に明らかである。

「彼は数学者である」「説教師である」などと言われたいことだ。それでいて「彼はオネットムである」と言われなければならない。この幅のある肩書だけが私を喜ばせる。一人の人間を見て、その人の著書を思い出すとすればそれは悪い懲候だ。私が望むのは、たまたまそういうものを用いる機会に遭遇して初めて自分の長所に気づいてもらうことである。（「極端にならないように」）一つの長所だけが目立ってしまって、それだけで自分の名前を呼ばれるのを恐れるのだ。上手に喋ろうなどと思わないことだ。それが問題となっているのならともかく、それを考えるのはその時のことだ。⁽⁵⁾

オネットムの概念を通じて、自らの特質をいかにして人に対し認めてもらうか、その方法を真剣に考えることをパスカルは試みている。このことは彼自身がプレシウな流れの中に一時なりとも身を置いたことがあり、彼自身の思想の在り方が、プレシウの中のリベルタンの傾向に反撥するにせよ、影響を受けていることを示している。ここで注目すべきことは、先にモンテーニュとの関連で指摘された職業人 *homme de métier* としてではなく、真の教養人 *homme de qualité* , 良識人 *homme de bon sens* としてのオネットムの有り様が具体的に示されたこと、「極端にならないように」 *Ne quid nimis* という言葉にオネットムの信条としての謙虚さや中庸の精神が窺い知れることである。

次に掲げるラ・ロシュフーコーの『箴言』ではオネットムの性格の一端を長所の「表わし方」とは別の方面から述べている。

偽のオネットムは、自らの欠点を他人の目からも、己自身からもおおい隠そうとする人々であり、真のオネットムは、完全にそれを知って、それを認める人である。……
真のオネットムは、何事も鼻にかけない人である。¹⁶⁾

このように、ラ・ロシュフーコーは、オネットムにおける本物と偽物の区別を行っており、自らの欠点を飾らない謙虚さこそオネットムの性格だとしている。

これまで述べてきたことで、オネットムについては、論語に「君子は器ならず」という言葉で示されたような現代の我々にとっても共感できる一個の人格者の姿が浮かび上がるのではなかろうか。すなわち、謙虚や寛容を旨とし、デカルトの言うような良識を良く用いる術を知る人をオネットムと呼ぶのである。モリエールに戻ろう。「この世で最も公平に分け与えられている」という良識に訴えかけるのが彼の喜劇ということになる。確かにこの意味で、ドラントが言うように、人間を描くには自然に従わなければならない、オネットムを笑わせるのは容易なことではない。モリエールは、それが美德にせよ、悪徳にせよ、極端に走って社会性を喪失した人間の滑稽さを性格喜劇の舞台にのせている。その上で、その主張を明確にし、非難されている欠点の滑稽さを際立たせるために、自らの代弁者を登場させるのである。ドラントのほか、『人間ざらい』のフィラント、『女学者』のクリタンドル、『タルチュフ』のクレアントなどがこれに当たり、彼らは全てオネットムの性格を帯びている。例えば、クレアントの次の言葉である。

私は人から尊敬される学者ではありませんし、知恵などと言えるほどのものは、私の中にとくにありません。けれども、ひとこと言って、私の学問の全てと言え、本物と偽物を見分けることができることです。私は立派な信者ほど尊敬すべき人は知りませんし、真の熱情から発する清らかさほど高貴で美しいものは知りません。¹⁷⁾

このように、モリエールにおける良識とは、デカルトのそれと一致して、本物と偽物を見分ける判断力と考えられる。ちなみに今ここで、モリエールが問題にしているのは、宗教的熱情における真偽の弁別である。これまで見てきたなかでも、ラ・ロシュフーコーは、オネットムについてそれを行なっているが、まさにこのような判断能力を備えた人格をオネットムと呼ぶのではないかと考える。

当時、オネットムの典型とされた人物に、ランブイエ侯夫人やスキュデリー嬢のサロンの常連であったシュヴァリエ・ド・メレという人物がいる。さらには多くのモラリストたちが自らの道徳論を形成したのも、この場所サロンにおける社交を通じてであった。モリエールは、彼の喜劇の価値を正しく判断するものとして、宮廷の洗練された趣味を引き合

いに出しているが、実際、彼におけるオネトゥテの理論と言えそうなものは宮廷や社交界で学んだものである。そこで、モリエールによる宮廷紳士の典型とも言えるフィラントの言葉を引用する。人間嫌いのアルセストの度を越した正義感をたしなめ、社会と折り合って生きてゆくように勧めている言葉である。

まあまあ、現代の風習を苦痛に思うのもほどほどにしよう。そして、人間性というものをちょっぴり許してやろうじゃないか。あんまり厳しく検討しないで、その欠点を優しい目で見えてやろう。世の中は親しみの持てる美德が必要なんだ。まっとうすぎてかえって非難を受けることだってある。完全なる理性はどんな極端も避けるものだ。そして、節度のある賢明さこそ望まれるのだ。時代遅れの美德のあの厳格さでは、僕たちの時代とも世間の習慣とも合わないよ。人間に完全さを求め過ぎるのだ。意固地にならないで時代に従わなくちゃ。それに社会を矯正してやろうなんて無類の気違い沙汰だよ。僕だって君と同じく、別の行き方をすればもっと良くなるだろう、と思えるたくさんのことを毎日見ている。だが、僕は刻一刻眼の前で何が起ころうと、君みたいに怒り狂うなんてことはないね。僕はやさしく人間をあるがままに受け取る。僕は人間がなすところを許すことができるように自分の心を持ってゆく。パリの街におけると同様、宮廷においても、僕の落着きぶりは、君のかんしゃくと同じくらいに哲学的だと思っているよ。⁽⁸⁾

「完全なる理性はどんな極端も避けるものだ」「節度ある賢明さこそ望まれる」こうした言葉の中にモリエールの喜劇を貫流する中庸思想が窺われる。それは人間の自然の感情 **nature** を重んじる彼の態度に通じている。それはモリエールを古典主義の作家として位置付けるものでもある。「節度ある賢明さ」とは、フィラントが自ら説明する彼の「落着きぶり」 **flegme** と相俟って、フィラントというオネットムにストア主義の賢者 **sage stoïcien** の肖像を与えているのである。ここに厳格な規範の押しつけを廃し、寛容な物の見方を説いたモリエールの姿を垣間見ることができる。他の点では、このフィラントの台詞に表われているのが、オネットムの処生術 **savoir-vivre** と言えるのではなかろうか。

II

これまでのところは、いわば良識人 **homme de bon sens** としての面からオネットムを論じたわけである。だが、この良識は容易に良き趣味 **bon goût** の問題と結びつきう

る。事実、パスカルの場合、彼のオネットムは彼による「繊細な精神」*esprit de finesse*の追求の一環として浮かび上がった問題と言えよう。モリエールに関して言えば、喜劇作家としての不偏不党の立場からリベルタンとも言えず、プレシウとも言えず、まして神学者でもない彼の「思想」はただ、滑稽なものを滑稽とする確かな目、万人に共通に備わっているはずの良識に依拠するものであった。すでに冒頭で述べた通り、作品の細部を取り上げてモリエールを論ずることは、彼の本質を見誤る結果になりかねない。そのことを認めた上で、モリエールのオネトゥテを他のモラリストたちとの、ひいては時代の精神との共通項において述べてみたのである。

そこで、この節ではモリエールによるオネトゥテに加わった彼独自の要素についていささか論じてみたい。すなわち、モリエールの代弁者が語る処生の態度は、宮廷や社交界の洗練された趣味「オネトゥテの理論」に彼の出身階層であるブルジョワジーの堅実さを加えたところに生じていることを指摘したい。まず紹介するのはドラントの次の言葉である。

あなたがたの喜劇の大いなる試金石は宮廷の判断です。成功する術を見出すために研究しなければならないのは宮廷の趣味なんです。判断がこれほど正当な場所はありません。出入りの学者は勘定に入れません。自然で素朴な良識や上流社交界の人々との交際を通じて、そこでは誰もが才気を会得します。それが比べるべくもなく、術学者たちの古臭いどんな知識よりもずっと見事に物事を判断するのです。⁽⁹⁾

モリエールにとって、こうした宮廷の趣味を代表する眼識のあるエリートと「平土間の客」*parterre* という言葉に表現される一般大衆とを結びつける絆が「良識」なのである。ドラントはこうも述べている。

良識とは劇場における特定の客席にあるものではありません。半ルイの金貨とわずか十五ソルの貨幣との違いは、良き趣味とは何の関係もありません。立ち観の人も、ちゃんとした席にすわれる身分の人も、間違った判断を下すことはありえます。つまり、大ざっぱに言って、私は平土間の賞賛を相当に信頼しているのです。その理由はと申しますと、平土間にいる人たちの間にちゃんとした規則に基づいて芝居を判断することができるいく人かの人たちがおります。それ以外の人も芝居を判断する良き方法によって芝居を判断しております。その方法とは事物に即しており、盲目的な偏見も、装った心遣いも、おかしい繊細さもないのです。⁽¹⁰⁾

モリエールは、ルイ十四世の宮廷の洗練された趣味を学んでいるが、その一方で既成の

理論の盲目的な信奉者である「上流社会の」観客の目よりも、素朴な庶民の内発的な感情としての「自然」の眼識を信頼したのである。ベルグソンは、その著『笑い』の中で良識をもって次の様に定義している。

良識とは対象を変えるごとに思考を変えつつ、絶え間なく適応し、再適応する一つの精神の努力である。それは様々の事物の動きに正確に従う知性の持つ柔軟性である。それは我々の人生に向けられた注意の動的な持続である。⁽¹¹⁾

ベルグソンは、モリエールの言を繰り返し、喜劇の目的は人々を笑わせることによって「風俗を懲戒すること」⁽¹²⁾ **châtier les mœurs** にあると述べている。モリエールが考えたような喜劇作家の仕事とは、悲劇と違って社会と密接に関わっている。人間の似姿を描くのだという態度がモリエールのモラリスト的な面に現代的意義を与えているのである。すなわち、モリエールにとって、悪徳ばかりでなく、美德さえもそれが本来の人間的な意義を忘れて、ただ機械的に適用されるだけのものとなれば、人間性を圧殺し、社会的に有害なものとなるのである。求められているのは、臨機応変の柔軟さ **souplesse** や優雅さ **grâce** なのである。そのため滑稽なものを舞台に上すことによってそこに生じる笑いは、社会の側から非社会的な人間に下された懲罰と言える。

III

それでは、モリエールにとって特権的な主題 **thème privilégié** であった宗教の問題をオネットムの観点から検討してみることにしよう。『タルチュフ』のクレアントは、「人間的で親しみやすい信心」⁽¹³⁾ **dévotion humaine et traitable** なるものを説いている。これは当時の「『べてん師』なる喜劇に関する手紙」というクレアント擁護の文書に見られる通り、一面信仰とは相容れぬ合理主義者の態度と言える。⁽¹⁴⁾ すなわち、信心に本物と偽物の区別を設けようとする試みは、そのまま信心を理性で判断することに当たるといのがその根拠である。この点をもって、モリエールの中にリベルタンの傾向を認めるべき可能性のあることは疑えない。以下、具体的にクレアントの信心を検討しよう。

タルチュフという似而非信者、偽善者を類希な聖人と堅く信じ、ぞっこん惚れ込んでいる偏狭な信心家オルゴンは、クレアントの理性的な言葉を受けつけることができず、かえってこれを「自由思想」**libertinage** の臭いがすると非難する。オルゴンによれば、信心から得られた平安によって、あらゆる現世的な執着を絶った心は、たとえ目前で家族が死ぬのを見ても乱されることはないのである。クレアントは、それが人間の感情というも

のかと受けてそこから真の信心についての長広舌を始める。彼にとって似而非信者と狂信家はしばしば同一のものなのである。

偽の勇者がいるように偽の信者だっているものです。名誉が導く戦いの場で、真の勇者は大騒ぎするものではありません。私たちが模範としなければならない真の善き信者もそれと同じようにやたらうわべを飾ったりはしません。いったい何です。お兄さんは偽善と信心の区別もつかないんですか。……人間というのは総じておかしい具合に出来ていますね。自然のままの人間なんて見たことがありません。⁽¹⁵⁾

良識を拠り所に真の信心と偽の信心とを見分けるべきだとの主張は、覚えず他から見れば理性をもって宗教を判断することになるのであろうか。「良識」「理性」そして「自然」とは、十七世紀古典主義の時代、しばしば並立して用いられている概念ではあるが……

モリエールは、いわゆる狂信家 *dévot* たちを、神が欲したまう以上に神の利害を擁護し、間違った宗教的熱情から他人の私生活や自由を侵害し、どこまでも彼らの非人間的で厳格な規範を押しつけようとする非難している。真の信者とは、もっと他人の行為について寛大であるはずであり、他人の犯す過ちを自己自身も犯しうるのだと自覚している者である。

マジャンディは、オネットムの哲学の理論がデカルトの『情念論』(1649)の出版などを背景に完成されていった旨、指摘している。⁽¹⁶⁾ 事実、「両極端を排する」⁽¹⁷⁾ *fuir les deux extrémités* というオネットムの信条を信心に取り入れたのは、フランソワ・ド・サルであり、この人の立場はユマニスム・デヴォ、あるいはキリスト教的ストア主義と呼ばれている。フランソワ・ド・サルは、その著『神愛論』の中で真の宗教的熱情 *vrai zèle*、もしくは純粋な熱情 *zèle pur* と、偽の熱情 *faux zèle* すなわち慎しみを欠いた熱情 *zèle indiscret*、うわべだけの熱情 *zèle spécieux* を峻別している。⁽¹⁸⁾

モリエールは、偽善と狂信が実は表裏一体であることを見抜いていた。彼の敵であり、『タルチュフ』上演禁止を策動した「狂信家の徒党」*cabale des dévots* の本質は、彼のドン・ジュアンによる偽善の告発に表われている。それはほぼ聖体秘蹟協会 *Compagnie de Saint-Sacrement* と同一視されている。聖体秘蹟協会とは、1622年カトリックの教えを擁護、推進することを目的に設立された秘密結社である。その初期においては、囚人の救済、病者の訪問など多くの慈善事業を行ない、その高邁で人間的な意図を世に拡めている。家庭生活や風俗におけるオネトゥテの支配、礼儀正しさ、品の良さ、礼拝の儀式において注意深く敬意を払うことなどを勧めている。ヴァンサン・ド・ポール、ボシュエら識者の賛同を得たのもそのためであろう。

この結社は若い娘の貞操を放蕩者から守ることや、襟ぐりの出し方を制限するなど婦人道德上の規制も重視している。そのことと相俟って、前述の個人の生活の純正化という趣旨は後に、初期の人間的な目的を外れ、行過ぎの併害をもたらすようになった。スパイ行為の濫用など人間性を圧殺する強圧的な態度から急速に世間の信用を失墜し、人々の怒りや憎しみを買ったのである。クレアントがオネットムとしての信心の有り様を述べたのは、そのためであること、それはマジャンディも認めている。だが、マジャンディは、その信心の原理がなお不安を伴うものであったことも指摘している。¹¹⁹⁾すなわち彼によれば、すでにシュヴァリエ・ド・メレのオネトゥテの理論にも見られる通り、その信心の有り様とは外面を社会に適応させ、なお自らの内的な精神の自由を保とうとするものであった。

IV

モリエールは、高尚な趣味を銜うちんぴら侯爵 **Petit marquis**、単なる気取りに墮してしまったプレシオジテ、学問のために学問をする術学者、狂信家の徒党など、その本義を逸脱し、人間の感情を忘れて機械的に適用される美德の滑稽さ、その「こわばり」 **raideur** を舞台に上したのである。そこに「風俗を懲戒する」という喜劇の意義がある。一般原則を個々の異なるべき事例に当てはめる愚と怠惰を避けるのは、ユマニスムの精神である。良識に基づく絶えざる反省と努力、真偽の弁別もそうした心構えの表われと言える。モリエールは、その思想の根底において人間性とその未来への発展を信じており、その意味でルネサンス以来のユマニスムの系譜に属する作家である。モラリストの追求したオネトゥテの理論は、人間性の探究と結びついている。本論ではモリエール喜劇にこのオネトゥテの発現を見てきたわけだが、逆にオネトゥテにまとめられる十七世紀の思潮を一人の喜劇作家を通じて考察した。最後に、モリエールは時代の影響を色濃く反映している作家であるが、その主張はあくまでも彼にとって絶対多数の観客であった民衆の支持を拠り所とするものである。彼のヒューマニズムの特性とその現代的意義はそこに求められるのではなからうか。

註

- 1) Paul BENICHOU : *Morales du grand siècle*, Gallimard, 1980p. 259.
- 2) *La Critique de l'Ecole des Femmes*, scène VI, p. 661, in *Oeuvres complètes de Molière*, éd. Georges COUTON, Bibl. de La Pléiade, Gallimard, 1976.
モリエールの引用は全てこの版による。
- 3) MONTAIGNE : *Essais*, I. 26, in *Oeuvres complètes*, éd. A. THIBAUDET

- et M. RAT, *Bibl. de La Pléiade*, 1962, p. 168.
- 4) Cf. Léon BRUNSCHVICG (éd.): *Pascal, Pensées et opuscules*, Hachette, p. 334. 森有正, 土居寛之訳, ストロフスキー『フランスの智慧』岩波現代叢書, 一九六七年, 七六頁。
 - 5) PASCAL: *Pensées et opuscules*, éd. BRUNSCHVICG, Hachette, p. 334.
 - 6) LA ROCHEFOUCAULD: *Maximes*, éd. J.-P. CAPUT, Nouveau Classique Larousse, p. 53.
 - 7) *Le Tartuffe*, acte I, 5, p. 909.
 - 8) *Le Misanthrope*, acte I. 1, p. 147.
 - 9) *La Critique de l'Ecole des femmes*, scène VI, p. 661.
 - 10) *Ibid.*, scène V, pp. 653-4.
 - 11) Henri BERGSON: *Le Rire*, PUF, 1983, p. 140.
 - 12) Cf. *Ibid.*, p. 13. ベルグソンはこの *châtiment* の他, *corriger*, *correction* も用いている。Cf. «peindre les moeurs» «représenter en général tous les défauts des hommes» (*L'Impromptu de Versailles*, scène IV, pp. 687 – 8.) «corriger les vices des hommes» (*Préface du Tartuffe*, p. 885.) これらは狭義のモラリストの定義ともなっている(『二十世紀ラールス』)。本論中に用いた *souplesse*, *grâce*, *raideur* の語彙もベルグソンによる。
 - 13) *Le Tartuffe*, acte I, 5, v. 390, p. 910.
 - 14) *Lettre sur la comédie de l'Imposteur*, in COUTON, *Oeuvres complètes de Molière*, I, p. 1170. Cf. 拙論『モリエールの宗教感情』(広島大学フランス文学研究3号:1984) 二九頁。
 - 15) *Le Tartuffe*, acte I, 5, p. 908.
 - 16) Maurice MAGENDIE: *La Politesse mondaine et les théories de l'honnêteté, en France au XVIIe siècle, de 1600 à 1660*, Slatkine, 1970, p. 791.
 - 17) Saint FRANÇOIS DE SALES: *Introduction à la vie dévote*, in *Oeuvres*, éd. A. RAVIER, *Bibl. de la Pléiade*, p. 219.
 - 18) *Traité de l'Amour de Dieu*. Cf. Jacqueline PLANTIE «Molière et François de Sales», *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, 1972, pp. 921 – 2.
 - 19) MAGENDIE: *op. cit.*, p. 890.